土車

つちぐるま

第　147　号

—令和５年６月20日発行—

公益財団法人　古代学協会だより

古代学協会所蔵
大般若経巻第五百八十（永久三年）
大般若経巻第百三十五（久寿二年）

古代学協会の所蔵資料に二点、平安時代後期の年記を持つ大般若経が含まれる。これら古写経に焦点を当てた展覧会「信仰の美—筆に託した祈りの世界—」を、このたび京都文化博物館で開催したため、あらためて、両資料の紹介を行いたい。

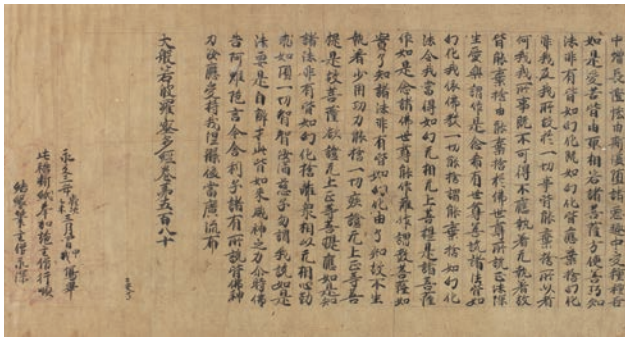
いうまでもなく、大般若経は、全六〇〇巻で構成される大部の大乗経典であり、わが国への伝来以降、僧俗のあいだで盛んに書写された。ここに紹介する両資料には、書写時の奥書が残されており、制作年のほか、関係者の名なども知ることができる。

永久三年（一一一五）の大般若経は、「大蔵寺経」などと通称される大般若経の一巻である。これらは、神前法楽のために和泉国内で勧進書写されたものであり、各紙紙背に捺された朱の多宝塔印が特徴である。幸い、五三〇巻にものぼる本品の僚巻が、奈良県五條市の満願寺に伝来しており（一括で重要文化財指定）、書写事業の全体像を伝えてくれている。ただし、本品の奥書には、これまでの調査では知られていない結縁者の名も見え、独自の情報として貴重である。

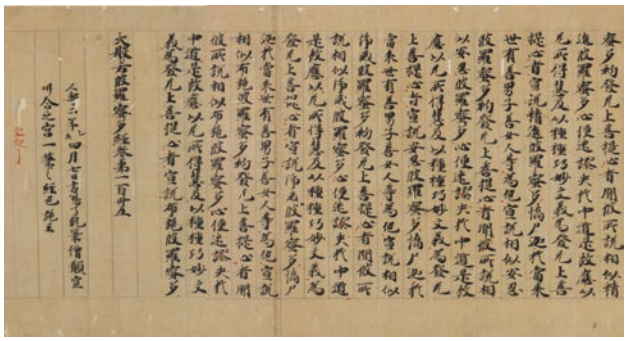
久寿二年（一一五五）の大般若経は、「川合宮一筆経」などと呼ばれるものである。願空なる僧が独力で全巻書写した大般若経であり、川合宮こと廣瀬神社（廣瀬大社・奈良県河合町）の神宮寺経と考えられている。一筆大般若経のなかでは、早例に属する。諸所分蔵の僚巻から浮かび上がる書写事業の様相もさることながら、柔らかく優美な書体も本品の魅力である。

これらの経巻は、仏典の書写事業が再び勢いを取り戻す平安時代後期の遺例として、まことに高い価値を持つと言えよう。

佐藤　稜介
（京都文化博物館）



『大般若経巻第五百八十』（巻末）



『大般若経巻第百三十五』（巻末）

発掘調査と歴史的自然資源

立命館大学教授　木立 雅朗

考古学と伝統工芸

発掘調査で出土する遺物は基本的に伝統工芸に繋がっている。その土地の伝統工芸と考古学が深く結びつけば、双方にメリットがある。伝統工芸の多くは近世以前に遡る歴史をもっている。発掘調査では、その技術や素材の変遷が明らかになる。考古学研究者からすれば、出土品の解釈を進める上で、伝統工芸に関わった人々との対話が有意義で参考になる。

地域史研究の場では、地域住民との情報交換・対話が大きな意味をもつが、その中には伝統工芸に関わる専門家も含めるべきだ。京都は今も多くの伝統工芸が残り、民俗考古学のフィールドとしては極めて恵まれた土地である。

尾形深省『陶工必用』に見る京都の土

尾形（乾山）深省は『陶工必用』という秘伝書を残している。この書には彼の師匠である野々村仁清の秘伝書も含まれており、彼らが共に京都・黒谷の陶土をベースにしていることがわかる。京都の粘土について、その利用方法やブレンド方法や比率について実に詳細に記録している。おもしろいことに、紹介されている原料のほとんどは京都とその近辺のものであり、黒谷・深草・日ノ岡など、今でもわかる地名が沢山でてくる。それぞれに多様な特徴をもっており、質も多様であり、仁清と深省はそれぞれの性質を見分けて、上手に調製し、使い分けていた。現在、陶芸家ですら「京都には土がない」と言うことが多いが、それは都市化によって陶土の採集が困難になったにすぎない。京都市は瓦や須恵器の窯も多く、平安京以前から近世に至るまで、陶土に恵まれた土地だった。発掘現場を見る限り、その粘土が取り尽くされ、枯渇したわけではないことが明白である。私はそれらを陶土として使ってきたが、尾形深省が指摘したように、確かに地点や地層によって粘土の性質が多様であることがわかった。

陶土や建築資材としての土

京都市内の発掘現場では「土取り穴」や「ゴミ穴」が多数検出されることが一般的だ。土を採掘した後、その窪地にゴミを捨てたと理解されることが多い。

「土」は壁土や屋根の置き土、カマド・土間など、多様な建築資材として利用された。また、中には陶土として利用できる土もあった。そのように考えると、「土取り穴」で採掘した土の利用方法も、発掘調査で明らかにすべきだと思う。それができれば、土地利用の実態をより詳細に明らかにできる。注意深く観察すれば、多くの「土取り穴」は地層が変化した場所で採掘を止めていることがわかる。おそらく、目的とする「土」があり、その土が途切れたため、採掘を止めたのだろう。発掘現場には「土の取り残し」しか残されないが、その「取り残し」から、目的とした土がどのようなものだったのか、どのようにして自然資源を活用してきたのかを明らかにすることができる。その具体像は発掘調査にとっても重要な視点だと思う。

伝統工芸との共同研究

発掘現場では「陶土」か、「陶土になり得ない粘土」かを識別することは困難だ。陶芸家ですら製作・焼成して初めてわかることが多い。発掘担当者には荷が重い判断だが、京都をはじめ、窯業産地の発掘調査を行なう場合には不可欠な作業だ。

京都のように、陶芸家や京都市産業技術研究所窯業チームが身近にある場合、共同研究を進め、情報の共有を図ることが比較的容易だと思う。京都市産業技術研究所は、いくつかの発掘調査で聚楽土の採集と分析を行ってきた。その結果、同じ聚楽土でも採集地点によって性質が違うこと、全国各地の粘土と比較しても同じ性質・成分の土がない京都盆地独特の土であることがわかったという。また、京焼陶工の中には、自ら土を採集して調製・製作している方がいる。その方々に粘土を提供すれば、共同研究や情報交換ができる。彼らにとっても京都の土の情報は有用なものだ。一般的に発掘担当者は「開発」に追われ、民俗調査や製作・焼成実験を十分に行なうことができない。それを補い、有効な情報を提供してくれるのが、伝統工芸との共同研究だと思う。

歴史的自然資源

「楽焼」が聚楽第の土で作られたことは有名だ。土壁の「聚楽壁」も同様だ。おそらく、聚楽第の建設工事中、堀を掘削してでてきた赤土で土壁や茶碗を作ったのだろう。後世になれば、その場所の土を使用したことに意味があった。

岡佳子氏によると、京焼の多くは

寺社などの庇護のもと、その領地の土を拝領して製作されはじめたものが多い。京焼は「土」をはじめとしてその土地の領主との関係性が重視された焼き物だった。単なる自然資源ではない。少しややこしい呼び方だが、こうした資源を「歴史的自然資源」と呼びたい。

ただし、京焼は中国・韓国の焼き物を如何に模倣するかが重要だった。地元の土の味を活かすのではなく、土のブレンド技術を発達させ、目的とする土味を作り出すことに力を尽くした。そのようなブレンド技術は『陶工必用』以来、現在の京焼にまで継承されている。聚楽土や粟田土は採取が困難だが、他産地の粘土をブレンドし、本来と同じ成分・性質の陶土を見事に再現している。素晴らしい技術だが、だからと言って、発掘現場や工事現場で確認される、本物の京都の歴史的自然資源を見過ごしにするのは不可思議なことだ。

発掘現場は資源と情報の宝庫

地震研究者の寒川旭氏は「発掘現場は情報の宝庫」であり、多くの分野の方々が活用すべきだと提言している。寒川旭氏は謎とされていた「底のない溝」など、いくつかの不明遺構が、地震痕跡であることを明らかにした。地震研究者でなければ理解できなかっただろう。また、ある土人形研究者は近世遺跡から多量に出土する土人形を前にして「今後は発掘資料なくして土人形研究は成立しない」とまで述べていた。発掘資料が、伝世資料を中心にした民俗学研究より遥かに豊富な資料であり、どの時期かが明確にわかるからだ。考古学研究者にとっても、土人形の民俗研究は出土品の意味を検討する重要な情報だ。

これ以外にも従来の考古学研究だけでは理解できない多様な情報は数多い。遺跡の価値を評価するためには、発掘現場を広く公開し、多様な意見を聞き取るしかない。

考古学以外の専門分野の方々が寄せる熱い思いに触れたとき、これまで、発掘現場で如何に重要な情報を捨て続けてきたのか、否応なく気付かされる。発掘担当者は「遺跡」を独占し、遺跡の本来の価値を狭め閉ざしてきたと批判されても言い訳ができない。発掘現場を開放し、多くの分野の方々が今より自由に研究ができるようにすべきだ。

そうした試みは、発掘現場の担当者からすれば、これはこれまでにない負担を強いることになる。しかし、同時に、「遺跡の良きマネージャー」として、遺跡の価値を大きく引き出すことができるだろう。

「国民共有の財産」

文化庁によれば、「埋蔵文化財は貴重な国民共有の財産です。大切に保存するとともに、できるだけ公開するなど活用に努める必要が」あり、どうしても「遺跡を現状のまま保存できない場合には事前に発掘調査を行って遺跡の記録を残し（記録保存）、その経費については開発事業者に協力を求めてい」るという。（https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/maizo.html　2023年4月30日閲覧）。

「記録保存」を行う発掘現場では、重要な情報や遺構・遺物の記録保存に努めるが、すべての情報が国民に公開され、国民共有の財産になっているわけではない。現在の発掘調査技術や体制では、その価値を知られずに失われているモノや情報があることは否定できない。

その中の一つに「自然資源」がある。土や石や砂も、人々が活用した大切な資源だった。そして、京都の自然資源で作られた文化遺産の維持管理には、当然のことながら、京都周辺の歴史的自然資源が欠かせない。

「京都の土」を活用するシステム作り

発掘現場でも工事現場でも、粘土は扱いが面倒で、作業効率が落ちる。しかし、もし、それが土壁などの土木資源や陶土として使用可能だった場合、有用な自然資源になる。さらに、歴史事象や遺跡に関わるものであった場合には、歴史的自然資源と呼んでよいだろう。これまで、発掘現場ではこうした資源を工事現場に捨ててきた。陶芸家をはじめとする多様な方々に活用して頂ければ、新しい活用方法を展開させるだけでなく、「土の価値」を知る多様な方々との情報交換によって、より深く豊かな研究へと発展できる。

今のところ、「京都の土」プロジェクトと呼んで、私が勝手にやっている程度だが、これを行政や民間を含めた、何らかのシステムに発展することができれば、京都の伝統工芸とのコラボレーションを大きく進めることができる。京焼・清水焼研究にとっても面白い試みになるだろう。実は、土だけでなく、砂や石も同様だ。

遺跡地図の整備と遺跡の保存は進んでいるが、それと類似した「粘土地図」もしくは「歴史的自然資源地図」を作り、その保存と活用を行なうことはできないだろうか。歴史的自然資源の保存と活用も、遺跡保存と同じように考えてゆく必要がある。

永井路子さん、最愛の夫のもとへ

同志社女子大学名誉教授　朧谷　壽

軽井沢の別荘にて 1974 年 8 月

　返事を書くのが躊躇われるほどに達筆な書信をまめに下さった永井さんだが、この数年の年賀状は妹さんの代筆で「姉は元気にしています」とあり、今年のには「姉は元気とは言えませんが、今年九十八歳を迎え何とか生きております」とあったので案じていた。その直後に黄泉の国へ旅立たれた（二〇二三年一月二七日に逝去、九七歳）。歴史小説家としての永井さんの偉大な功績はメディアなどで報じられていることでもあり、ここでは私的なお付き合いの一端を紹介して想い出とさせていただく。

　ご主人を語らずして永井さんは語れない。それに、ご主人は「家内と私は一心同体」とよく仰っていた。そのご主人とは平安時代史研究の権威であり、後年に清泉女子大学教授を勤められ、『摂関時代史論集』『藤原行成』（人物叢書、吉川弘文館）などの名著を遺された黒板伸夫先生（二〇一五年に九二歳で逝去）である。先生は「国史大系」の編輯者で東大教授であった黒板勝美博士の甥にあたり、先生が東大の国史学科に合格したことを報告に行くと「病床の伯父がとても喜んでくれた」と申されていた。先生は卒業後、歴史の研究者になりたかったけれど父の会社（機械関係）を継がねばならず、その方向へ。しかし時世に合わず会社は下降線をたどり、ついに閉めることにし、従業員の就職先をすべて世話したうえで閉じた、と申されていた。「人には絶対に迷惑をかけない」を信条とされていた先生のお人柄がにじみ出ている。

　会社の社長時代に永井路子さんと結ばれた。お二人を取りもったのは、愛して止まないモーツァルトである。詳しいことは忘れてしまったが、東京のいくつかの大学（永井さんは東京女子大学国文科、瀬戸内寂聴さんの三年後輩）の学生が集まってモーツァルトの同好会のようなものがあったらしい。連絡の遣りとりで受け取る永井さんの字と文を見て「素敵な女性」と想像していたところ実際に会った時に大したことがない、と知った。ところが、ある時、美しい才女が目の前で書いている字を見て、この人が永井路子だ、と。つまり思い違いだったとわかり、やがて結婚へと傾いていった。これらのことはお二人とお会いする以前の話で、すべて黒板先生から直接お聞きしたことである。

聖フローリアン修道院前にて（オーストリア・リンツ）１９８１年８月

　ところで私が、永井路子さんと知り合う契機は、すなわち黒板先生との出会いによる。先生が会社を畳んで間もなくのこと、古代学協会が、ひょんなことから（その原因は私にある）日本銀行京都支店の旧屋を入手して平安博物館を開館することになり、一年前の一九六七年から開館準備に取り掛かった。それに際して黒板先生の恩師、坂本太郎名誉教授（恩師は黒板勝美）を介して角田常務理事（当時）へ紹介があり、文献・有職課の強力な助っ人として先生にご協力いただくことになった。先生は鎌倉山の瀟洒なお住まいから月に平均して一週間ほどお通いになった。当初はホテルを利用されたが、ほどなく下鴨膳部町の私の下宿の一部屋を定宿とされ、永井さんが一人で京都に来られた時にも利用されていた。先生が京都に居られる時には、朝は近くの食堂で食べてタクシーで館に向かう。夕方になる頃には草臥れてしまい、またタクシーで下宿の近くのフランス料理店か鮨屋へ。たまーにラーメン屋へ。すべて先生が支払われ、私が出そうとすると、あの柔和な先生が怖い顔をされるので甘えることにした。食事を終えて帰ってから近くの銭湯へ。なお、同じ下宿に京都大学の大学院でインド哲学を研究しているＩさん（無類のモーツァルト好き、父が大丸デパート社長）がいて毎晩のように私か先生の部屋に寄ってモーツァルト談議に花を咲かせていた。このような生活が半年余り続いた。平安博物館は黒板先生が来られなくなった翌年の五月に開館した。その間、永井さんも、何度か下宿を利用され、史蹟廻りに同行したり、食事をご馳走になったりした。先生がご一緒のこともあった。その後、会うたびにお二人が口を揃えて「あの京都生活は楽しかった」と仰ってくださった。開館後の出会いは私の上京によるところが多い。

　その後、黒板先生は歴史書の専門

出版社である吉川弘文館の編集長に就任された。そのころ東京出張がわりにあった（未完史料のマイクロ複写の仕事で宮内庁書陵部、内閣文庫、尊経閣文庫など）私に、先生は「東京の夜は空気が悪いから……」と仰って鎌倉泊を誘ってくださった。お言葉に甘えて、夕刻になると吉川弘文館に立ち寄り、先生と一緒にグリーン車に乗せて貰い鎌倉まで行き、駅からタクシーでお宅まで。夕食をご馳走になり（東京で食べて帰ることも）、奥様ともどもモーツァルトを聞きながら歴史や音楽の話で盛りあがった。鎌倉山での楽しい日々が走馬灯のように浮かんでくる。このご夫婦は鴛鴦を超えた仲の良さで、時おりお二人が顔を見合わせては微笑まれる。思いあまって先生に「夫婦喧嘩をされたことがないのですか」と質問したところ「そんな、喧嘩なんて勿体なくて……」という先生の返事。

聖心女子大学の宮代会館　１９９４年４月

京都国立博物館
右端は下坂守学芸員（当時）2003 年 5 月

先生はその後、聖心女子大学へ講師に招かれ、さらに清泉女子大学に専任教授として赴任され、鎌倉山の家を処分されて島津山ヒルズに住いを移された。そして晩年は聖路加レジデンスに遷られ、そこでお二人は生涯を閉じられたのである。

黒板先生が聖心女子大学に関わって居られた時には、平安時代の権威のM教授が居られたので、なにかに付けて声をかけていただき、よく上京して酒席を共にした。そして史学科の研修旅行は京都と決まっていて二泊三日で、一行は数人の先生と二、三〇人の学生さん（院生も）だったかと記憶する。私も時間のやりくりをして同行した。この頃には平安博物館から同志社女子大学に転じていたかと思う。

ご夫妻とのお付き合いで心に残る記憶は、お二人が中心になっていた東京のモーツァルト協会のイベントで「モーツァルトの旅」に誘っていただいたことである。その時の予定表とアルバムは大切にしてある。一九八一年の八月五日から一四日までの十日間。新東京国際空港からルフトハンザドイツ航空で、当時はアンカレッジ経由でハンブルクを経てフランクフルト着。ウィーン経由で最初に訪れたのはドナウ河中流の古都リンツ。モーツァルトの交響曲第三六番（K四二五）の名称になった街である。翌朝には急行「モーツァルト号」で九〇分ほどかけてザルツブルクへ。ホームに降り立った時には感激でしばらく歩がすすまなかった。長い間思い描いてきたモーツァルトの街。三泊四日のザルツブルク。朝は食事前に有志とともに観光、食後から夕刻までも……。夜は音楽鑑賞。ザルツから貸し切りバスでメルク、そこから観光船でドナウ川からの景色を見ながらワインの町クレムスまで。船を降りた時に教会の鐘が聞こえてきた。すかさず黒板先生が「これ何の鐘かご存知？」と。一同考えこむ。先生、にやにやしながら「暮れ六つ＜クレムス＞の鐘」と。皆で大笑い。先生は時おりこうした駄洒落を口にされる。ここからバスでウィーンへ。ウィーンでの三泊四日もザルツ同様、昼は観光、夜は音楽鑑賞。この旅を通じてモーツァルトとの距離が縮まった。お二人との思い出はまだまだたくさんあるが、紙数が尽きた。

三重県四日市市久留米遺跡
左端は山中章三重大学教授（当時）2004 年 7 月

束帯姿の還暦の黒板先生
平安博物館の清涼殿 1982 年 10 月

最後にひとつだけ紹介しておきたいこと。ご夫婦で編纂の『黒板勝美の思い出と私たちの歴史探求』（吉川弘文館）が二〇一六年に第二七回大衆文学研究賞を受賞された。一読をお勧めする。　**（当協会理事長）**

角田文衛博士遺贈資料（十・完）

横浜市折本貝塚発掘記念写真

本写真は昭和六年（一九三一）十一月、東京帝国大学理学部副手であった八幡一郎（一九〇二～一九八七）が主宰した、横浜市折本貝塚発掘調査の記念写真である。縦十一・九㎝、横十五・七㎝で、写真の縁が写り込んでいることや印画紙の状態から、紙焼の原版を複写したと考えられる。『角田文衛博士遺贈資料調査報告―書簡類―』図版第五5[1]で既に報告したものである。

発掘は、横浜市平等山善教寺第十七世住職平等通昭（一九〇三～一九九三）及び実弟文成（一九〇七～一九七〇）の斡旋と、岡書院の坂口保治の協力により、十月二十五日と十一月一日から三日までの計四日間行われた。平等通昭は大正十二年（一九二三）東京帝国大学文学部選科入学、梵文学科卒業後は大学院に進学し、修了する昭和四年（一九二九）まで梵文学研究室副手を務めている[2]。八幡一郎は大正十三年（一九二四）に東京帝国大学理学部人類学科選科修了、理学部副手を委嘱されており、両者は副手時代に知遇を得たもの思われる。この調査には、旧制成城高等学校地歴研究会と成城小学校児童の参加もあった。

写真二列目右端の眼鏡をかけた男性が平等通昭、四列目左端は大山史前学研究所所員の甲野勇（一九〇一～一九六七）、その右隣でベストを着た男性が同研究所所員の竹下次作。甲野勇の前に立つのは文科二年乙の今井冨士雄（一九〇九～二〇〇四）、三列目右端でソフト帽を被り、腰に手を当てているのが文科一年乙の角田文衛（一九一三～二〇〇八）である。最前列で、俯き加減に長い熊手を持っているのは成城小学校教師の内田庄次である。

調査では縄文時代前期（諸磯式期）の竪穴建物跡と、それを被覆する貝層が検出された。竪穴建物跡は一辺四・二ｍの平面正方形で、高さ約五十㎝の竪穴壁、周囲には幅約十㎝の壁際溝を有する。複数の柱穴と竪穴壁寄りの一隅に炉が確認された。貝塚は竪穴内に形成され、最も厚く堆積した貝層は約二十五㎝の表土下、約一・三五ｍあった。遺物は数点の完形土器、打製石斧、有孔角器、針状骨器、鳥骨製骨管等[3]で、坂口保治の所見では下層から爪形文土器、上層から隆線文土器が多く出土したという[4]。諸磯式土器あるいはその直前の時期の竪穴建物跡の発見は、当時学界でも広く耳目を集めた。旧制成城高等学校地歴研究会では、十一月十五日の第二回科学祭で完形の赤彩土器や石斧、骨器、鹿及び魚骨などを展示している[5]。

四日間に亙る調査に角田文衛は旧制成城高等学校地歴研究会の一員として参加し、その概要をMein Freitagebuch; Nr.7（「私の自由日記 第七」）に克明に記している。十月二十五日、七時二十分に渋谷駅東側プラットフォームに集まった旧制成城高等学校地歴研究会のメンバーは、教師の小山直三郎、鈴木一郎、今井冨士雄、柳田為正（理科二年乙）、野添誠（理科一年甲）、本城某及び角田文衛で、東京横浜電鉄（現、東急東横線）で綱島温泉駅（現、綱島駅）に行き、平等通昭宅まで自動車で移動。八幡一郎と坂口保治に合流し、十時頃から発掘を開始。八幡一郎と坂口保治は竪穴建物の西北隅を確認し、旧制成城高等学校地歴研究会も竪穴建物らしい痕跡を発見した。この日は平等通昭宅で夕食を御馳走になり、二十時に自動車で綱島温泉駅に向かい、帰宅したのは二十二時頃であった。

十一月一日の八時に渋谷駅に集合したのは、今井冨士雄と角田文衛、成城小学校教師の内田庄次と引率児童らである。内田庄次は昭和四年（一九二九）から昭和八年（一九三三）まで成城小学校で社会科の教鞭を執っていた。在籍期間は短かったが、成城小学校における歴史科の開始時期を尋常小学校の五・六年から四年に早めて定着させたこと、社会史・経済史・文化史及び外交史に視点を向けて歴史教材の開発を行ったこと、ドルトン・プランに基づく授業形式を歴史学習に応用し、児童の自発的な学習意欲や態度を育成させた点で高く評価されている[6]。

内田庄次はまた、郷土史研究として昭和四年（一九二九）九月から昭和五年（一九三〇）七月にかけて成城小学校周辺の石器時代遺跡の踏査及び遺物収集を行っていた[7]。実際の郷土教育「古物採集の實習」では、土器や石器を採集・写生させたり、出土地点を地図に落とさせたりしたうえで「こんなものがどうしてこゝにおちてゐるのですか。」[8]と問いかけをしている。歴史教育において外での学習を重視していたことからも[9]、この日の発掘参加は学習生活の一環であった可能性が高い。

綱島温泉駅で甲野勇、中村某と合

流、坂口保治及び平等通昭・文成兄弟は発掘に着手していた。日記には、「中就（ママ）あるメッチェンは土器を袋に入れてくれたりした。夕刻彼女を始め内田さん尋常科の諸君が歸つてから、甲野さん、坂口さん、今井さん…等と彼女について頻りにうわさをする」と思春期らしい一面が覗く。写真の平等通昭左隣の女性が、あるいはこの Mädchen（メッチェン）（少女）であろうか。坂口保治と今井冨士雄は平等通昭宅に宿泊、甲野勇、中村某及び角田文衛は帰途に着いた。翌十一月二日は四時限目と六時限目を出土した土器洗いに充てている。

明治節の十一月三日は早朝に渋谷駅で坂口保治、今井冨士雄と待ち合わせ、綱島温泉駅に向かう。現地で八幡一郎と合流。午前十時頃、東京帝国大学副手の駒井和愛（一九〇五～一九七一）及び喜田新六（一九〇三～一九六四）、学生の斎藤忠（一九〇八～二〇一三）が、午後三時頃に郷土史家で教員の石野瑛（一八八九～一九六二）が来跡した。この日で竪穴建物跡はほぼ完掘。八幡一郎、坂口保治、石野瑛と角田文衛は平等通昭宅で夕食を御馳走になり、太尾駅（現、大倉山駅）まで歩いて横浜方面に出る石野瑛と別れた。

角田文衛は八幡一郎や坂口保治と目蒲線を乗り継ぎ蒲田駅で下車、八幡一郎の母が営む店で茶菓子の接待を受けている。蒲田駅から京浜線（現、京浜東北線）で品川駅までの車中、八幡一郎と話に実が入り、「その公平な立場に深く感心した。我々にはあの気持が必要であると泌々思ふ。」と日記を締めくくった。

「私の自由日記 第七」に記載された参加者と写真を比較すると、撮影は十一月一日と考えられる。折本貝塚の竪穴建物跡は、後続する縄文時代中期（勝坂式期）の竪穴建物の平面形態が方形であることの必然性を示す例証[10]として重要な発見であった。そして五年後、山内清男に対して反抗心を露にした角田青年を、冷静かつ温情をもって諭した八幡一郎[11]と初めて親交を深めた調査でもあったのである。

本研究は JSPS 科研費 JP21K00979 の助成を受けたものである。

註

（1）星野達雄・平田健編『角田文衛博士遺贈資料調査報告―書簡類―』（京都、二〇一九年）

本稿において、この調査を「甲野勇指導のもと、角田文衛、今井冨士雄及び柳田為正らが参加した折本貝塚の発掘」（十三頁）及び「山内清男自身が原稿に追われて上京がままならないことから、信頼できる八幡一郎や甲野勇に指導を託したのであろう。」（十三頁）と紹介した。その後の文献調査等により、調査主体者は八幡一郎で、甲野勇の参加は十一月一日のみであったことが判明した。同報告図版第五所収の山内清男筆葉書（J4697）で「指導者八幡一郎先生」と記していることとも齟齬がないことから、この二文については訂正したい。

（2）村嶋英治「タイにおける組織的日本文化広報の先駆者：日泰文化研究所主事平等通昭（通照）の『興亜興仏』的文化交流事業（一九四〇―四三年）」（『アジア太平洋討究』第四十六巻、東京、二〇二三年）

（3）I.K（甲野勇）「餘白錄 折本貝塚に於ける竪穴の發見」（『史前學雜誌』第三巻第五号、東京、一九三一年）

（4）八幡一郎「雜報 武藏折本貝塚に石器時代竪穴發見」（『人類學雜誌』第四十六巻第十一号、東京、一九三一年）

（5）満江巖編「地歴研究會の活躍 折本貝塚の發掘 大竪穴を發見す」（『成城學園時報』第二十四号、東京、一九三一年）

（6）福田喜彦「昭和初期における成城小学校の歴史教育改革―内田庄次の

理論と実践を通して―」（『社会科教育研究』第一一一号、東京、二〇一〇年）
（7）内田庄次『新國史教育論』（東京、一九三〇年）
踏査は計十七回に亘り、世田谷区下祖師谷や喜多見などで打製石斧十九点、石鏃二点、石匙五点及び縄文土器破片多数を採集していている。
（8）註7、三四九頁。
（9）内田庄次「歴史教材の系統案と取扱方針」（『教育問題研究』第四十七号、東京、一九三〇年）
（10）八幡一郎「40.日本石器時代の住居型式」（『人類學雜誌』第四十九巻第六号、東京、一九三四年）
（11）平田　健「第2節　書簡類からみた青年期の角田文衛」（『角田文衛博士遺贈資料調査報告―書簡類―』、京都、二〇一九年）

平田　健（客員研究員）

本連載は、角田文衛博士の遺贈資料を題材に平田健先生と協会職員・竹内千津氏によってリレー形式をとって掲載して参りました。一三四号（二〇一八年）から長きに亘りご愛読いただきましたが、一旦本号をもって完結とさせていただきます。平田先生には今後は貴重な学史資料を対象としたご研究について本誌へのご寄稿をお願いする所存です。

（編集）

出版だより

▽山田邦和著『京都の中世史7「変貌する中世都市京都」』

日本史では十一世紀から十六世紀までを「中世」と呼ぶのが通例である。この時代には、武士が大きな力をふるうようになった。ただ、武士の本拠は関東であると認識されたことから、武士の時代である中世は、ややもすると東国を中心にして語られることが多かった。そこでは京都はどうしても影が薄くなったし、日本全体の首都が京都から鎌倉に移ったと誤解する向きさえあったのである。

しかし、実際には中世を通じて京都は日本の首都としての地位を譲ることはなかったし、また、経済や文化の中心であり続けた。さらに京都は鎌倉をはるかに上回る日本最大の巨大都市であった。元木泰雄氏（京都大学名誉教授）が企画編集委員代表をつとめて編纂された本シリーズは、そうした「京都の中世史」を通観し、新しい日本中世史像を構築することを目指している。

本書はその最終巻で、同志社女子大学教授・当協会理事（研究部長）の山田邦和氏が執筆された。日本中世史のシリーズの場合、ともすれば文献史学だけに偏りがちになるのであるが、本書は考古学的な研究成果を主としつつ、平安京の創設から豊臣秀吉の時代にいたるまでの京都の都市構造の変遷を通観している。古くから使われてきた「鎌倉時代」という時代名を「京・鎌倉時代」と呼び替えたり、鎌倉幕府の成立時期を、源頼朝勢力が源義仲（木曽義仲）を滅ぼして京都の王権の守護者としての地位を確立した元暦元年（一一八四）一月二十日とするなど、斬新な提案も多い。

本書の特色はいくつも挙げられる。たとえば、考古学と文献史学の成果を総合して作成された、平安時代前期、同中期、同後期、京・鎌倉時代という各時期の平安京の復元図は、京都の都市構造の変化を一覧できるきわめて便利なものである。また、発掘調査を丁寧に落とし込んだ多数の復元図は、京都の考古学の研究成果をわかりやすく示していてくれる。著者が収集してきた文献史料や絵画史料がところどころに挿入されていることも、新出史料の紹介という点で貴重である。

さらに、京都という都市を中心市街地である「洛中」だけではなく、その周辺の「衛星都市」群をも含めた大きな都市圏として捉え、それを「巨大都市複合体（コンプレックス）」と呼ぶところなどは、まさに著者の独擅場といえよう。世界史的な観点から、十二世紀の世界の諸都市の面積を比較し、その中で中世京都の位置づけを考えているのも興味深い。考古学を主体として京都の歴史を語る書物は、まだまだ多くはない。その点で、本書は今後の京都研究の基礎として大きな意義を持っているといえよう。

（吉川弘文館、令和五年一月一日刊、A5判、二八八頁、二七〇〇円＋税、ISBN978-4-642-06866-6）

発行者　公益財団法人　古代学協会
604-8131　京都市中京区三条通高倉西入ル
菱屋町四八
電話〇七五-二五二-三〇〇〇
発行日　令和五年六月二十日
印刷　明文舎印刷株式会社